

Sさんは日本人男性の平均寿命を超える80代後半の男性で、太平洋に面した漁業と林業の町で生まれ育った。昨年の晩秋に突然、右の手足が動かなくなり、言葉もスムーズに出なくなかった。急性期の総合病院脳神経外科に救急搬送され、脳梗塞と診断された。症状が出てからある程度の時間が経過していたために、保存的な治療が施行され、脳梗塞の後遺症に対するリハビリ目的に当院に転院された。幸いにも、右片麻痺の程度も軽く、入院した当時は歩行器で歩行するのもおぼつかなか

病気を克服された愛読者

—20年前の拙著にまつわる思い出話—

情報広報部 橋本 洋一

ったものの、歩行器歩行での自立、杖歩行での自立を経て、独立歩行で自立できるまで改善された。約2カ月間の地道な訓練が身を結んだのである。

腰椎圧迫骨折による腰痛があつて、入院当初はなかなかリハビリ訓練に専念することができなかつたが、以前作製された硬いコルセットを装着することに拒否反応を示され、軟性コルセットを作製し、なんとか継続して装着してもらった。腰痛からもようやく解放され、リハビリ訓練に身を入れるように

なつた。2カ月あまりのリハビリ訓練で、発症前に限りなく近い状態まで改善されたことは喜ばしいことであつたが、言葉が明瞭でない(構音障害)ことが後遺症の1つとして残り、もともと引つ込み思案な性格の方であつたが、さらに拍車がかかつたようであつた。退院日に娘さんが迎えに来られ、退院直前の説明に臨んだ。現在の日常生活能力が極めて高く、脳梗塞を発症する以前の状態に限りなく近いレベルまで改善されたこと、スムーズに言葉が出てこない構音障害もかなり改善

したことを、言葉を話すことにもつと自信を持つこと、そして最後に塩分を制限することや寒冷刺激を避けること(寒冷な環境の中で保温に努めること)、質の高

い睡眠を取ること、便秘は避けること等の脳梗塞の再発防止に必要な生活上の注意事項について説明した。

Sさんは私の説明に耳を傾けながら、何か言いたそうな雰囲気を感じ出して、もじもじとしていた。緊張しているためか、本来ならばもつと円滑に出るはずの言葉が出ないようであつた。Sさんは言葉を出すよりも早く行動に移した。Sさんが私の前に1冊の本を差し出した。

その本には見覚えがあつた。「これ、先生

が書かれた本です。入院中、先生の本を何回も読み返しました。ああ、先生はこういうふうに考えられているんだって」。Sさんが私の本を愛読しながら、リハビリに取り組み、病気を克服されたことを大変光榮に思った。回診時にはそういった話はまつたく出なかつたので正直なところ驚いた。Sさんが愛読書として提示された拙著《父母の帰郷》を北海道新聞社から世に出した20年前のことを思い出した。純文学作家として、文学界で確固たる地位を確立されていた友人の小檜山博先生のおかげで、世に出すことができたのだつた。ご自身の作品と同様に、いやそれ以上のお力を注いでいただいた結果として誕生した本であつた。本の校正のため、ご多忙の中、何回ものんびりしている私のお尻を叩いてくださった。小檜山先生の多大なるご尽力がなければ、世の中に出すことはできなかっただろう。

亡くなつた両親の骨壺を膝にのせて津軽海峡を渡つた時のことを書いたエッセイ名を、本の題名にするようにアドバイスしていただいた。当初《両親の帰郷》という題名であつたが、《父母の帰郷》に変更することを先生から勧められた。

病気を克服されたSさんのような方に、写真からはみ出しそうな20年前の肥満顔の私の写真が載っている本を愛読していただいたことに当惑しながらも、うれしい気持ちを隠せない私がそこにいた。